樋口一葉

和田芳恵編

近代文学鑑賞講座 3

角川書店

近代文学鑑賞講座
第三巻
樋口一葉

昭和三十三年十一月一日　初版印刷
昭和三十三年十一月五日　初版発行

定価　三五〇円

編者　和田芳恵
発行者　角川源義
印刷者　中内佐光
製本者　宮田勝太郎
発行所　株式会社　角川書店
東京都千代田区富士見町二ノ七
振替口座　東京　一九五二〇八番
電話九段(33)〇一一一（代表）

©1958 Printed in Japan
暁印刷・宮田製本
落丁・乱丁本はお取替え致します

目

次

樋口一葉の人と作品　和田芳忠　五
本文および作品鑑賞　和田芳恵　二
大つごもり　三
にごりえ　三五
十三夜　五六
たけくらべ　六六
わかれ道　一三四
日記抄　一四五
随筆抄　一九二
書簡　一九七

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

樋口一葉の窓　三一

一葉さん二題　幸田文　三三
一葉の印象 I　穴沢清次郎　三七
一葉の印象 II　半井桃水　三三
文学史と一葉　関良一　三九
萩の舎と一葉　藤井公明　四三
一葉外伝　塩田良平　五三
一葉と『文学界』　勝本清一郎　六〇
一葉の日記・書簡　和田芳恵　七一
一葉の作品の総合鑑賞　湯地孝　八一
一葉小説と古典　吉田精一　九三

樋口一葉研究史　関　良一　二九九
樋口一葉参考文献目録　三〇七
年譜と同時代史　三三七

写真は大竹新助・角川書店写真部・

樋口一葉の人と作品

和田芳恵

樋口一葉は明治五年三月二十五日（太陽暦に直せば五月二日）午前八時、東京府第二大区一小区内幸町一丁目（東京都千代田区内幸町二丁目）一番地の東京府構内官舎に生れた。本名はなつ。父は東京府少属樋口為之助（間もなく、通称、名乗を単一にした壬申戸籍の公簿に則義と届け出たが、生れた時の大吉から為之助まで、しばしば改名した。）母はたき。

なつが生れたとき、長女ふじ（十六歳）、長男泉太郎（九歳）、次男虎之助（七歳）がいた。

則義、たきは甲斐国山梨郡中萩原村（山梨県塩山市中萩原）の出身。

則義は、中萩原村十郎原組の農民八左衛門の長男として天保元年に生れ、大吉と名つけられ、たきは、同村青南組の農民安兵衛（古屋姓）の長女として天保七年に生れ、あやめと名づけられた。（あやめの生年は、最近、私が発見した弘化三年と、さきに上野晴朗氏が探しだした嘉永三年の「宗門人別帳」に拠る推定）しかし、戸籍面では、天保五年生れになっている。また、あやめは、のちにたきと改名した。

この八左衛門は、農民にはめずらしく学問かあり、村人の訴訟事を引きうけていた代言人で、また、山梨郡等々力村万福寺の門徒惣代だったこと、嘉永五年に、百姓代として、中萩原村小前百姓百二十人の惣代になり、柏原堰賦課金割当の不当を老中阿部伊勢守へ直訴したことなとが近年あきらかにされた。

大吉も、また、父八左衛門に似て農を好まず、峡東稀にみる碩学といわれた中萩原村慈雲寺の住職白巖和尚の寺小屋の筆子になった。

やがて、慈雲寺の境内と地続きに住む安兵衛の娘あやめと親しくなった。あやめは美人で働きものだった。大吉と自由恋愛の結果、あやめは、姙娠したが、親たちは、ふたりの結婚に反対した。

安政四年四月、大吉とあやめは、ひそかに村を棄てた。目指すところは江戸で、ここには、同郷の先輩真下専之丞がいたから、そこにわらじをぬぐつもりだった。

その頃真下専之丞は、蕃書調所の勤番筆頭で九段の役宅にいたが、もとは中萩原の農民で藤助（益田姓）といい、八左衛門が兄事していた。この人の妻も、同郷の農民の娘でふじ（金子氏の出）といった。ふたりは中年から江戸へ出て、苦労の末、士族真下の株を買い、現在の位置をきずきあげた立志伝中の人であった。

大吉と姙娠九か月のあやめは、江戸につくと、専之丞夫妻の厄介になり、彼等の立身出世の方法を、実践することになった。これは、大吉が父にあてた訖状にそえた日記二冊と、大吉が郷里の父へ折に触れて出した三十五通の書簡などから手にとるように知ることができる。

要するに、大吉は、はじめに専之丞の使い奴になり、彼の世話で蕃書調所の小遣に雇われ、あやめは長女ふじを生みおとすと里子に出して、本郷湯島の旗本稲葉家の娘鉱の乳母になった。大吉とあやめは、十族の株を買うために夫婦共稼ぎて貯蓄した。

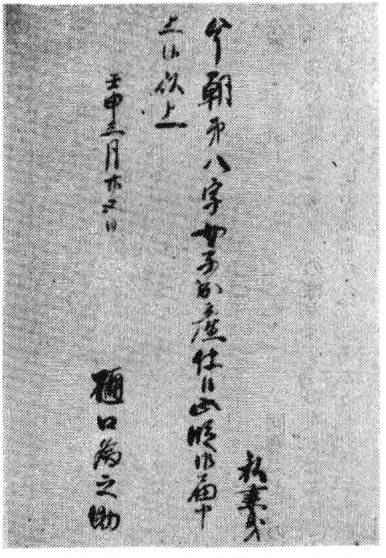
安政六年、大吉は御勘定組頭、菊池大助の中小姓になった。菊池大助は、幕府の内憂外患による人材の抜擢主義のため、急速度に昇進して、文久二年には外国奉行に任ぜられ、菊池伊豫守隆吉と称した。大吉は、彼の公用人であった。

真下専之丞は、自分のことを「役人桂庵」と云っていたほどだから、菊池大助に大吉が仕える場合も、専之丞の口

ききだった。

慶応三年七月、大吉は南町奉行配下八丁堀同心浅井竹蔵の三十俵二人扶持の株を買い、五番組仁杉八右衛門配下になった。大吉とあやめは、故郷を棄ててからの長い念願だった目的をとげたのに、十月に徳川慶喜は大政奉還し、徳川十五代で終止符を打つことになった。大吉あやめが江戸へ出てきたときから、足掛け十年目のことである。こうしてふたりの努力にもかかわらず、また、出発点へ戻ることになった。

一葉の父は、真下専之丞にならって士分の置位を得たが、時の権力が代れば、じき凋落しなければならない例を、明治維新後の専之丞の生き方で知った。彼は最後には陸軍奉行並という幕府の高官だったから、横浜の野毛にかくれ住み、私塾を開いて生活するようになった。



出生届の写し　明治5年3月25日，午前8時東京府庁舎で生れた時，一葉の父が書いた覚え書。

一葉の父は、身分がひくかったから新政府に仕えることはできたが、旧幕臣の出だから、その将来に期待もできなかった。彼は、この世でたよりになるのは金銭だと考えたようである。

一葉の父は東京府の官員を辞めて、警視庁に奉職するようになったが、しかし、一方では土地家屋の売買と金融の仕事をしていた。

明治十年三月、一葉が公立本郷学校へ入学、明治十六年十二月、下谷池ノ端にあった私立青海学校小学高等科第四級を首席で修了するまで、樋口家は、かなりの資産があり、その生活もゆたかで

あった。

このことは、明治二十六年八月十日の「日記」のあとに、「七つといふとしより、草雙紙といふものを好みて、手まりやり羽子をなげうちてよみけるが、其中にも、一と好みけるは英雄豪傑の伝、任侠義人の行為などの、そゞろ身にしむ様に覚えて、凡て勇ましく花やかなるが嬉しかりき。かくて九つ斗の時よりは、我身の一生の、世の常にて終らむことなげかはしく、あはれ、くれ竹の一ふしぬけ出しがなとぞあけくれに願ひける。されども其ころの目には、世の中などといふもの見ゆべくもあらず。只雲をふみて天にとゞかむを願ふ様成りき。其頃の人は、みな我を見ておとなしき子とほめ、物おぼえよき子といひけり。父は人にほこり給へり。師は、弟子中むれを抜けて秘蔵にし給へり。おさなき心には、中々に身をかへり見るなど能ふべくもあらで、天下くみしやすきのみ、我事成就なし安きのみと頼みける。下のこゝろに、まだ何事を持ちて世に顕はれんとも思ひさだめざりけれど、只利慾にはしれる浮よの人あさましく厭はしく、これ故にかく狂へるかと見れば、金銀はほとんど塵芥の様にぞ覚えし。十二といふとし、学校をやめけるが、そは母君の意見にて、女子にながく学問をさせなんは、行々の為よろしからず、針仕事にても学ばせ、家事の見ならひなどさせんとて成き。父君は、しかるべからず、猶今しばしと争ひ給へり。汝が思ふ処は如何にと問ひ給ひしものから、猶生れ得てこゝろ弱き身にて、いづ方にも〳〵定かなることいひ難く、死ぬ斗悲しかりしかど学校は止めになりけり。」と一葉が書いている「只利慾にはしれる浮よの人」の中に、父親則義がふくまれていると見なければならない。

これは、一葉が書いた、いちばん幼少の思い出だが、この学校は私立の吉川学校であり、また、青海学校で、いわば、一葉の父が学んだ寺小屋に近いものであることは注意すべきことだ。これは一葉の父の少年時代への郷愁と云えるだろう。この頃は私立と呼ばれていたが、代用小学校のことで、江戸時代の手習指南所から明治時代に小学校に変ったものである。公立よりも私立の小学校は教師が親切であり、また、昔からの関係で、商人や職人の子が多く通っ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

ていた。

士族の娘の一葉は、誇りを持って私立の小学校に通い、たのしい夢の多い少女時代を送ったろうが、この士族という身分は、金で買ったものであり、ほんの数か月という短かい期間を経て、明治維新を迎えたものであるとは知らなかったようである。

十三歳になった一葉は、短かいあいだ父の知人和田重雄について和歌の手ほどきをうけ、また、これも知人の松永政愛の妻から和裁を習い、家事の手伝に日を送った。この間も、暇をみては独学したが、明治十九年八月二十日に、小石川安藤坂にあった中島歌子の歌塾萩の舎に入門した。歌子は、水戸藩の志士林忠左衛門の妻だったが、天狗党の変で忠左衛門に死別してから、桂園派の加藤千浪の弟子になり、その後独立して萩の舎を開いた。同門の弟子だった御歌所の寄人伊東祐命の後援もあって、皇族、華族などの上流社会の夫人や娘が多く集まっていた。

萩の舎の才媛(さいえん)は、乙骨牧子、田辺花圃、伊東夏子などであった。牧子は英漢学者乙骨太郎乙の娘で早く江崎政忠へ嫁した。花圃は龍子と云い、元老院議官の娘、伊東夏子は日本橋の鶏問屋の娘だった。一葉は、牧子がいなくなってから、「萩の舎の三才媛」のひとりに加えられた。

明治二十一年、則義は荷車請負業組合の設立を計画した。長男泉大郎は病死し、次男虎之助は分家させていたので、一葉を相続人にし、ふたつ年下のくにも、まだ成人していなかったので、老後の心配もあった。

しかし、この事業は、創立間もなく失敗し、多くの借財を残して、身心ともに疲れはてた則義は、明治二十二年七月十二日、神田淡路町で死んだ。

相続人の一葉は、まだ十八歳であったから、則義は、病床で渋谷三郎に、ちかい将来、一葉と結婚してほしいと頼んだ。

渋谷は、真下専之丞の妾腹の孫で、一葉よりは五つ年上であった。この頃東京専門学校（早稲田大学の前身）の法

科に学んでいた。

死期がせまった則義の気やすめから、渋谷は一葉と婚約したが、おちぶれて係累の多い樋口家へ婿入りする気はなかった。

間もなく、一葉親子は、芝に住んで陶器の絵付師をしていた次兄の虎之助と同居するようになったが、母たきと虎之助の仲がうまく行かず、思いあまった一葉は中島歌子へ相談した。歌子は一葉を女学校の教師に世話しようとし、萩の舎へ引きとったが、半年近くたっても実現しなかった。

そこで、一葉は、明治十三年の九月の末、本郷菊坂町七十番地に借家して、母とくにを虎之助の許から引きとって、針仕事と洗濯などで生活をたてた。最低の暮しさえ容易でなかった。

萩の舎で、一葉よりは四つ年上で、好敵手と思っていた田辺花圃が『藪の鶯』という小説を書き、金港堂から出版されたのは、明治二十一年六月のことであった。このときの印税が田辺家に役立った美談は、則義が事業に失敗するころだったから、一葉にとってはうらやましいことであった。『藪の鶯』は、この前の年の、花圃がはたちのときに脱稿したものに、坪内逍遙が手を入れて出版社へ持ちこんだものである。

花圃は、この一作で新進女流作家になった。

さて、一葉は、花圃が『藪の鶯』を書いたはたちになった明治二十四年一月に、『かれ尾花』という一篇の習作を書いた。一葉の書いた多くの小説のなかで、執筆年月を書き入れたのは、この『かれ尾花』だけである。この一葉の気持は、おそらく、花圃が『藪の鶯』を書いた年になったから、自分も小説を書こうという、立志のあらわれであろう。

この年の四月十五日に、『朝日新聞』の小説記者半井桃水の弟子になり、小説の手ほどきを受けることになるが、これは、また、坪内逍遙についた田辺花圃を、そのまま公式的に真似たものと考えられる。

これは、一葉の父則義が真下専之丞を追いかけた立身出世主義の公式を踏襲したものである。つまり、一葉は父の申し子であった。

ある目的を、短期間にとげようとすれば、どうしても、公式化されてくる。一葉が、このような考えになったことは、もちろん、性格的なものや教育にもよるが、その根本は、やはり、若い女戸主一葉が支えていた家庭が、いつも、経済的におびやかされていたからだろう。

一葉が桃水の弟子になったとき、じき書いた小説が売れ、それで親子三人が生活できると信じていた。しかし、一葉の書いた原稿は金にならないばかりか、活字にもならなかった。

一葉の小説が活字になったのは、桃水が仲間や弟子のために刊行した同人雑誌『武蔵野』の創刊号にのった『闇桜』であり、入門してから一年近い明治二十五年のことだった。

『闇桜』は、隣り同志の良之助とお丁代はおさななじみであり、良之助に思いをうちあけかねたお丁代は恋の病いに身も心もやせほそってゆくという悲恋物語である。

『武蔵野』は三号でつぶれたが、一葉は『たま襷』について『五月雨』をのせた。

この間に、桃水の推薦で、『改進新聞』へ『別れ霜』を連載した。この後追い心中をあつかった『別れ霜』も、なんの反響もよばなかった。

一葉は、この間に、半井桃水からかなりの生活費をみついでもらったらしいが、荻の舎の中で当時独身だった桃水とのあいだを疑われ、心ならずも一葉は桃水から遠のかなければならなかった。

一葉は、甲府から出ていた『甲陽新報』へ『絳づくえ』を寄せた。これは、東京大学の学生時代、樋口家によく出入りしていた野尻理作が、この新聞の主幹だった関係である。

桃水と別れるようになった一葉の小説の世話は花圃が見た。花圃はこの頃、三宅雪嶺と結婚して、はげしい文壇的

な野心は薄れていたから後輩へ自分の地盤をわけてやる気だった。

金港堂から出ていた一流の文芸雑誌『都の花』へ、こうしてこの一葉の前期の力作『うもれ木』が連載された。明治二十五年十一月のことである。

『うもれ木』は、入江籟三という名人気質の陶器の絵付師が主人公。お蝶という兄思いのうつくしい娘がいる。そこに、かつての弟弟子で破門された篠原辰雄があらわれ、ふたりは、この辰雄というぺてん師にだまされ、事情を知ったお蝶は自殺、兄の籟三は海外博覧会へ出品するための制作を、庭先へたたきつけて、からからと笑うという物語である。

一葉は『うもれ木』を書くとき、虎之助に逢って聞きただしており、また、図書館で調べた材料をいかしてもいるのだが、籟三には奇山と号した兄虎之助のおもかげが濃い。

この小説に注目していた星野天知は、やはり、花圃を通じて『文学界』へ執筆をもとめ、明治二十六年二月号の『都の花』にのった『暁月夜』の後をうけて、『雪の日』が『文学界』の三月号に掲載されるようになった。

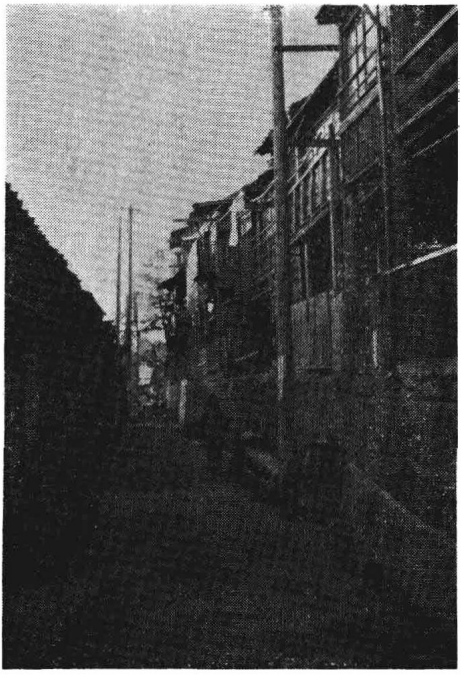
この頃、半井桃水は執筆のかたわら、神田三崎町に松濤軒という葉茶屋を開いていたが、一葉は、ともかく『都の花』という一流文芸雑誌へ自作を発表する幸運をつかんだ。これは一葉の意地と執念の実現でもあった。しかし、一葉は平静にたちかえると、このために、なにか大きな犠牲をはらってしまったと思った。それは半井桃水との恋愛を中断したことである。しかも自分の意志からではなく、萩の舎の仲間に無理強いされ、生木を割くように別れたのであったと思った。

一葉は、しかし、桃水の愛情よりも、小説を売り、原稿料を得たいということを重く見ていた。それは親子三人が生きるためであった。その目的をとげるころ、一葉は桃水は父の慈愛と兄の誘掖を兼ねた人だとは感したが、この人についていては小説家になることができないと思い、生活に追われていたから夢中で桃水を裏切っていた。つまり、

一葉は桃水を利用して文壇に出ようとしていたとも云えよう。

『都の花』に原稿がのると、一葉は、はじめて、桃水はこの世であっただひとりの人と思うのである。

一葉が桃水に対して、はげしい恋愛感情を持つようになったのは、『うもれ木』を発表したのちであろう。一葉は、このために創作に専念することができないようになった。『暁月夜』が掲載されて間もなく、『都の花』は廃刊になったが、雑誌はなくなっても、単行本はだしていたのだから、花圃の『藪の鶯』のように、最初から単行本は出すことができたはずである。



菊坂町の裏町　一葉がひそかに新しい文学へ志し，習作を書きはじめたのは，本郷菊坂七十番地のわびしい長屋であった。この辺りは今も明治の影が濃い。

一葉は、原稿ができないために生活に行きづまり、明治二十六年八月五日から、下谷龍泉寺町で、荒物や子供相手の品物を売る小店を開くようになった。これも、桃水が開いていた葉茶屋を真似たものだろう。

龍泉寺町に引越した日の日記の中に、一葉が「唯かく落はふれ、行ての末にうかぶ瀬なくして朽も終らば、つひのよに斯の君に面を合はする時もなく、忘られて、忘られはてゝ、我が恋は行雲のうは

の空に消ゆべし。昨日まてすみける家は、かの人のあしをとゝめたる事もあり。まれには、まれ〳〵には、何事その序に、家居のさまなりとも思ひ出でゝ、我といふものありけりとだにしのばれなば、生けるよの甲斐ならましを、行ゑもしれずかげを消して、かくあやしき塵の中にまじはりぬる後、よし何事のよすがありておもひ出られぬとも、夫は哀れふびんの情にはあらて、終に此よを清く送り難く、にごりにごりぬる浅ましの身ともおもひ落され、更にかへりみられべきにあらず。」と、桃水に遥かに呼びかけていることは、このときの一葉にとって桃水が生きる目当てあったと云えるだろう。

一葉は、吉原に近い龍泉寺町で十一か月のあいだ、小店の女主人として暮した。

ここては、一葉は『琴の音』『花ごもり』の二篇を『文学界』に発表したが、萩の舎へ出入りしていたときのように、劣等意識になやまされることもなく、伸びのびと庶民の中にたちまじって生きた。

一葉は、下谷龍泉寺町て急速な人間的成長をとげたばかりでなく、傑作『たけくらべ』の素材をつかんだ。

明治二十七年二月、一葉は著名な易者の久佐賀義孝を訪ね、相場をやる資本を出してもらうことを理由に、かなりの金を引きだそうとかかった。これを切っかけに、かなり長いあいだ、ふたりの交際がつづいた。

この間に、一葉は久佐賀から妾になれと云われたこともあった。このときの一葉の反応は、『わかれ道』の中に生かされていると云えよう。

どうして、一葉が、こんなに金をほしいと思うようになったかということは、三宅花圃と鳥尾ひろ子が、萩の舎から独立して家門を開くと知って、自分も歌塾をひらきたいと思い、その費用の調達にかかったのだろうという推定は、日記から簡単にみちびきだすことができる。しかし、一葉には、梅の舎という歌塾をひらいていた同門の田中みの子をたすけ、小出粲を後楯にしようとする案があったこと、また、下谷龍泉寺町から引越した本郷丸山福山町の借家は、待合や銘酒屋が立ちならんだ町中にあり、その借家には床の間さえなかったことは、一葉が歌塾をひらくにしては条

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook